

鹿児島県奄美大島の植物

田代善太郎

昭和2年8月7日

大島古仁屋にて、御召艦にまゐり聖上陛下に拝謁を賜わる。陛下に御目にかける植物の実物標本と分布説明書とを携帯し、陛下御上陸中に陳列を了し、風はげしければ標本の上には布を張り又新聞紙をはる。

やがて陛下は甲板上に成らせられ、陳列品につき熱心に御覧になつた。夜、我は持参したる分布地図と説明書二通とを以て陛下に対し説明を申上ぐ。

聖上陛下奄美大島行幸の際御前に於て説明申上げたるもの

説明書

◎植物地理より見たる奄美大島の植物と屋久島及種子島の植物

奄美大島植物は沖縄以南の暖地分子を保有すること多く、しかも其顯著なる植物が本島を此限とする事實は奄美大島植物目録並に附屬統計表によつて之を認むるを得べく、本島が琉球植物区系の境界線に近きをあらわすものなり、且つ十島中の宝島、小宝島に其主要なる分子を存することは之が植物区系を考察する上に於て看過すべからざる事実にして動物の分布ことに爬虫類のそれを参照して考ふべき問題なり。明治中期の採集者の記録及踏査者の実験談によれば宝島に大島植物中の沖縄分子としてリウキウマツあり、アダンあり、ヤンバルセンニンサウあり、アカテツ、ハマイヌビハクスノハガシハ、モンパノキ、ミツバハマゴウ、テンノウメあり、又シロバナミヤコグサ、スナザ等あり此等の片鱗によりても此島の奄美太島と区系を同ふすることを知るべし。宝島の地に位する悪石島には、日本本土の植物区系に属するクロマツを産するを聞けど明かならず。

更に屋久島種子ケ島の植物を見れば、日本内地の植物要素は殆んど此両島に止まるを知る。植物発生史に於て早くも発達を遂げたる裸子植物の分布を調査すれば、内地より両島に亘りて産するクロマツ、アカマツは全く大島になく之に代るにリウキウマツを以てし、又タネガシマゴエフは屋久島、種子ケ島特有の珍種なり。此事實は奄美大島群島が早くも屋久島、種子ケ島及び本土と分離したるに因すべく之により区系の相異を認むべきなり。

又、スギとモミとが日本の固有植物たりツガを我国南部山地に於ける木本の主なる要素とする点より考え

て屋久杉を以て名ありモミとツガとが多く且つ發育の頗るよろしき屋久島は本土と植物区系を同ふするを知るべし、ソテツの産が大島と屋久島及種子島とに共通するは未だ其何故なるやを詳かにせず。

我西南暖地に於ける木本の主なる要素たるカシの類は、ウラシロガシとホソバウラシロガシとの共通するものを除きては屋久島、種子島に産する本土の分子は大島に至りては全く跡を絶ち新に別種を産せり、コナラ、ナラガシハ、カシハ、クリ、クヌギも種子島、若くは屋久島に止まる。なほ類縁の近き植物の両者間に於ける相異を比較すれば、エノキはリウキウエノキとなり、ヤマグハはシマグハとなり、マルバウツギはオホシマウツギとなり、クロキはリウキウクロキとなる。屋久島と土佐とに産する異型大果のオニクロギは大島に及ばず、又、カウゾはカヂノキとかわりシヤシヤンボはギイマとかわり、コバノトネリコはシマダゴとかわり、ハマアザミはシマアザミとかわり、ヤマヒヨドリバナはシマヒヨドリバナとかわる。屋久島及薩摩の紫尾山とに分布せるタカネシマセンニンサウは奄美大島に及ばず、ヤンバルセンニンサウの外二種の研究を要すべき種類これに代り、屋久島より日向豊後及土佐に亘りて産するシマサクラガンビも奄美大島には及ばず、奄美大島には特殊のオホシマガンビを有す。ムラサキシキブの類は南より分布せるヒロハムラサキシキブ(オホムラサキシキブ)を除きては屋久島、種子島を共通するものなく、却て奄美大島にはオホシマムラサキを有す。本土のツルマサキが屋久島、種子島になくして奄美大島にてはトゲミツルマサキにかわり、コバノクロウメモドキが同じくリウキウクロウメモドキにかわり、ヤマツ、ジがケラマツ、ジにかわる事實は本土と奄美大島との区系の相異を示すと共に種子島及屋久島の植物の本土とは多少の相異をあらはすを知る、ヤマフヂ、フジの共産両島になき事實も之を証するに足る。

ヤマガキ、ハギ及マルバハギ、九州特有として知らる、ツルカウゾの種子島及屋久島にありて奄美大島に及ばざるは屋久島及種子島が九州と密接なる關係を有しに美大島と植物区系を異にする卑近の实例なり。

種子島、屋久島、甌島にあるツクシザクラが大島にあり(註四字不明)として知らるゝも其果して野生なりや否やを確むる能はざれば其分布を論断する能はず。

其他に分布上の連絡を有する植物を有し、しかも其

南限たるは上記の実例を説明するものなり。

屋久島にヒメシヤラノキ、ヤハズアヂサキ、ガクウツギ及珍奇なるオニクロギ、ツルマンリヤウを有することは、屋久島が九州四国、近畿の外帯地方を連絡せる特殊の分布系統中に属するを知るべし。

ツルマンリヤウは屋久島を除きては、大和の吉野に之を産するを知るのみ

屋久島の頂上には、タカネヒカゲノカヅラ、マンネンスギ、ヒロハコメススキ、ミヤマヌカボ、マヒヅルサウ、イハカミ、タカネマコナ、タウヒレン一種等の寒地性植物あり又、アカシデ、ヤシヤブシ、コハウチハカヘデ、ヤマボウシ等の山地植物あり本州中部以北との関係を見るべき植物を産するを珍とす。なほ屋久島には特殊なる植物の発達あり、ヤクシマチヤボゼキシヤウ、ヤクシマヒメアリドウシラン、ヒメウマノアシガタ、ヤクシマカラマツ、ヤクシマトリアシシヨウマ、ヤクシマフウロ、ヤクシマリンドウ、ヤクシマシボガマ、カウモリサウ一種ヤクシマダケ、アヲツリバナ、ヤクシマイソノキ、シヤクナンガンビ、ヤクシマホツツシ、アクシバモドキ、マルバミヤマシグレ等其例を見るべし。

由來北方分子の九州に侵入する経路に三つあり、一は中国をへて北部に来るものにして其数最も多く広く中部に分布するも、以南に及ぶは稀なり、二は近畿より四国をへて南部に来るものなり、其数稍少なし、一、二は共通のもの多かるべし、三は鮮満地方より分布するものにして其数更に少なく大抵は中部に止まるも海岸線に沿ふて南下するものあり四国、近畿にも及ぶ。屋久島に入る地方分子の経路は前に記述せる特殊の山地分布系統より考へて近畿、四国、九州の東南部を連ねたる外帯よりせるを察すべし。

以上の記述によりて奄美大島と屋久島及種子島との植物区系の相違は判然たるものあり而してなほヒメカカラ、ヒメヒサカキ、シマウリカヘデを屋久島と奄美との双方に産するは、何故なるか、又、ヤマグルマ、シラキヤマバウシが両者に亘りて産せる事実は之を如何に考ふべきか、シマイハウチハを奄美大島に産するは何故なるか、此等は何れも八重山列島に分布上の連絡を有するものなれば夙に支那中部との関係により由來したるものにはおらざるか。果して然らば奄美大島と屋久島にも産せざるオホシマクサアヂサキを産する理由も想像するを得べし。屋久島には羊齒類よく發育し台湾と共通するもの多きは孢子の伝播しやすき形質によつて生じたる現象なるべし。

◎日本植物区系中の暖地代表植物の分布

沖縄以南に産する注意すべき暖地植物の本県によく発達するもの、北限に就きて述べれば奄美大島植物目録の終尾に附したる統計表にあらはれたる如く、顯著なる暖地分子は多くは奄美大島に止まり、余勢僅にひいて屋久島種子島に及びこれより以北は漸くその数を減ずるもなほ本州中部に達するもの少からず、之は地質時代に於ける気候の交替により南北の間に往來せる最後の変化を保存するものなり、而して往々遺存暖地帯と認むべきものあり。

屋久島及種子島に止まる代表的分子は、ガシユマルにして、クサトベラ、ツキイゲ、イボタクサギ、モダマ、カキバカンユノキ、ヒメムラサキ、イソマツ等之に伴ふ。

九州に於けるヘゴ分布の区域は薩摩及大隅にありては外海に沿ひたる地と鹿兒島灣側によりて多少其範圍を異にするもほ同緯度の地にあり。島嶼（嶺島、五島の福江島）にありては稍北方に位せり。ソテツの分布範圍亦同じ、メヒルギ此に産しアコウは頗るよく發育す、此地域は九州本土にありては暖地分子を包藏すること著しきを以て名ある地方にして、サクラツ、シ、シマウリノキ、フカノキ、ギヨボク、カウチニツケイ、サクララン、ゲツタウ、クハズイモ、やゝ地方に及べる、アデク、ボンテンクワ、ツルモウリンクワ、アカミノヤブガラシ、サツマサンキライ、ヤマデキ、タニワタリノキ、ヘツカニガキ、ツグモチ及び島嶼にありては更に北に及べる、カウシウウヤク、フヨウ、ナタヲレノキ、モクレイシ、ギヨシクワ、ミヤコシマツヅラフチ、ヤマゴンニヤク等を數ふべく、ゲンバイヒルガホも此区域によく繁茂し之より以北に及びて豊後南部、平戸島、対島、其他に存するも、薩摩阿久根、日向青島にありたるは痕跡をも失ひたるが如し。以上列記の植物は島嶼に於ては北するに随つて漸く其数を減ず。

ヤツコサウ、キイレツチトリモチ、リウビンタイ及びノアサガホはヘゴよりも北に及びノアサガホは西に串木野、五島の福江島東は豊後大島に達す、ヤツコサウは四国（土佐幡多郡八束村）にもあり。クサマルハチ（ヘゴ科の）産地之に接近す。ハサマルハチは紀州九木に及びリウビンタイは紀伊、伊勢、伊豆にも及べり。

之より北に分布する代表的暖地の分子はピラウ、アコウ、にしてタチバナ、ナギ、ハマナツメは之とほほ相伴ふ共に東西の沿海地方に発達するも地形と潮流との影響によりて対稱的ならず、アコウは西より北に及び之を産し平戸島、（大島及附近の諸島にも及ぶ）

註 クサマルハチは其後昭和9年8月三重県大杉谷魚便飛の山にても田代之を見出せり

と其対岸とに止まるも、ピラウは更に進みて玄海の沖ノ島に及べり。九州の東側に於てはピラウは、豊後水道を其北限とし土佐伊予の対側に点々痕跡を止めたり、アコウは更に土佐の岬角を縫ふて東北に進み徳島市附近に及び其対岸紀伊の日高郡にも之を産せり。タチバナは南部に多きはいふまでもなく西北沿海地方の諸島に多く産し橋の小戸の古称を存する宮崎には社叢に散点するにすぎざるも豊後南部にはかなり多く佐賀関にもあり、とんで国東半島の一部に及ぶ、ナギは東西とも同一区域に散点するも稀なり、大和春日山の産異例に属す。ハマナツメは同一区域の外海沿岸の地に散点するのみならず内海地方にも及べり。ハマセンダン、ハカマカヅラ、ハマナタマメ、ホソバワダン亦北限を同ふす。

九州に於ける此地域内に産する暖地性木本にて注意すべきものはヒゼンマユミにして喬木をなすを珍とす。明治38年頃肥前の諫早城山に於て発見せられ大正10年より11、2年に亘り豊後南部三、四の島嶼及び豊前宇佐の南院内村の社地に之を産するを知り九州の東西同緯度の地に分布する事実を明かにせり。

大正12、3年に亘り沖繩島の^{ラガン}拜所に之を見出すにより、その九州に分布するは沖繩植物の北漸するものなるを知る。之を筑前玄海の沖の島に見出すは意外なり、尙沖の島には、ナタヲレノキの大樹より、ユスノキの樹林ありカウシウウヤクあり、ミヤコシマツマラフヂあり、オホタニワタリあり、カウシウウヤクは東は日向南部の島嶼に止まり西は南薩の地及飯島に及ぶも更に進みてこゝに産するは四面海を繞らし原始林のよく保存せらるゝがためなるべし。ナタヲレノキは島嶼地方より北し大隅の肝属半島、薩摩の紫尾山、飯島、五島平戸の二小島を経て対馬とこの島とに及ぶものなり、日向に産するや否や明かならずオホタニワタリは東は日向にあるも人為の毀損によりて發育よろしからず、紀伊の南部の島嶼にはなほ之を産する所あり、沖の島における發育は島嶼地方に於けるものと殆んど異なる所なしといふ。此の如きは潮流の影響と見るべし、筑前沖の島が山林の絶体保存を持續するは邦内無比といふべく暖地性植物の集団地として志布志湾内の杣島(ピラウに混生する多くの暖地性植物を有す)と南北好一對なり。

九州の西海岸はのみ偏して分布するものにはナタヲレノキの外数種の注意すべきものあり、アラモジは「ジャワ」より肥前に分布し薩摩にあるも大隅に及ばず、コクテンギ亦此例に属し長崎附近に及びナンバンキブシは筑前に及べり、ハマデンチャウは島嶼をつたふて北し五島に多く又よく發育せり、薩摩の阿久根、肥後天草の富岡にあり、タヌキアヤメは西薩ことに川

内、阿久根肥後天草の富岡にあり。タヌキアヤメは西薩ことに川内、阿久根の地方に多く五島の福江島に及べり、志布志中学校構内にあるは自生なりや否やを明かにせず。クロイグは天草、福江島にあるも九州本土に及ばず、アスター属一種、種子島に産するものは宇久島にも産し、イソノギクは沖繩より対馬、九州、中国に及べり、ダンギクは、飯島及び本土の之に対する串木野より五島及肥前外海沿岸に及び対馬に達せり、カントラノヲは黒島(十島のうち)と飯島とにあり、夙に欧州の学者に蒐集せられライデンの腊葉館に之を藏するは驚くべし。又サツマノギクは、我国の飯島、野間半島及串木野の地にこれを見るのみ珍種なるが前と同じくライデン腊葉館の所藏品によりてその郷土は「ジャワ」なることを知る。

ノヂギクは九州の東西両海岸に対称的なるも内部に入るは珍らし、西は肥後の日奈久まで純型を見、熊本辺にはこれとシマカンギクとの雑種とみるべきものあり、東は豊後水道を入り国東半島に及び進んで周防と播磨とに入る大分別府間の高崎山麓のものは雑種の如き形質あり又伊予より南して土佐の中部に及ぶ。九州の東海岸乃至四国紀伊に偏して分布す例なきにあらず、アラギリの豊後南部及室戸岬等に及び、スナシマメの土佐に産し、タイキンギクの土佐紀伊等に産するは此例なり、シホギクの土佐、紀伊に産するは分布の経路を如何に説明すべきか。

由来暖地性植物の存在する所を集群をなすを常とす、前記の沖の島志布志、杣島と佐多岬、青島等は其著例なり、九州東部は肝属半島、高嶮山、都井岬より油津、鶏戸一帯の地、日豊境界附近の地より、佐賀関に至るまでには岬角、社叢、島嶼等に集群の見るべきものあり就中豊後南部の深島、黒島、津久美島には意外の暖地性植物あり。佐賀関に対する伊予の三崎半島亦注意すべきものあり、豊後水道以内には暖地性植物の種類を減じ發育の程度を異にするも、島嶼の潮流の衝にあたる所になほ見るべきものあり、安芸周防の沿岸並に島嶼に暖地性植物のやゝ多きはその影響なりといふべし、長門、周防の沿岸並に島嶼に暖地性植物更に多く其發育旺盛なるを見るは関門海峡より入る潮流により淡路の南部、播磨の地に暖地性植物の多きは鳴門海峡を通過する潮流による、佐多岬より足摺岬に至るの地、室戸岬其他土佐阿波沿岸の地と紀伊の南部には所々に暖地性植物の集群を見更に東海地方に及ぶ。

九州西部につきて述べれば、山川、指宿地方より入りて、鹿児島地方には暖地性植物集群のよく保存せらるゝものあり、顯姓地方、枕崎地方より野間半島地方、串木野地方、阿久根出水の地方に接続して暖地性

植物の集群を見る、紫尾山は薩摩北部の重鎮にして遠く海を隔て、甌島と相対し共に暖地性珍植物の宝庫なり、「コバフンギ」あり、タネガシマセンニンサウあり、ナタヲレノキあり、カナメノキあり、リウピンタイの外数種の暖地性羊歯あり、これを繞れる川内川流域にはチスデノリあり、クハレシダあり、ツクシムレスズメあり、之に接続せる山地と薩肥境界山脈を越えて球磨川流域にはリウキウガネブあり、此地方一帯は遺存暖地帯と認むべきが如く球磨川流域にはなほシマバライチゴを産し注意すべき暖地性草木を見る。島原半島にはチスデノリあり、シマバライチゴあり、ノアサガホあり、「ヤマデキ」あり、ヒゼンマユミの多き諫早城山にはヤマヒハツあり、ミサホノキあり、シロシヤクシヤウあり、相離れて肥前藤津郡又はホソバシヨリマあり、其他有明湾沿岸の地筑前、筑後、天草島に亘りて暖地性植物の分布を見るは偶然ならざるべ

し、天草島の外海側ことに多し。

なほ西部には五島平戸の諸島に暖地性植物集団地の注意すべきものあるは、いふまでもなく、肥前西部より北部に亘りても点々に遺存するものあり、北部伊万里湾地方には意外の発達を見る、黒髪山に暖地性植物の多きは其余勢と云ふべし。吾岐並に対島の南端とこれより以東の地もこれに準じ長門に至りては發育更によりしきを見るは沖ノ島を洗ふ潮流の影響といふべし。

此地遺存暖地帯と認むべきものにユノミネシダを産する薩隅二、三の地、日向五箇瀬川中流地方、紀伊の温泉地方、シマテンツキを産する大隅、豊後、肥後、肥前の温泉地方、モエシマシダを産する別府及球磨川中流の地方、ミズギを産する温泉地方の山地の如き是なり、ムカデランの各地に散在する如きも亦此類と認むべきが如し。